
7. オーディション

フランシス・ローレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7. オーディション

【Nコード】

N2388T

【作者名】

フランシス・ローレライ

【あらすじ】

6月の暑い日。マミが「アルテドナウ・アンサンブル」のオーディションに……イサムは激励を兼ねてつきあうが……。

そして6月になった。

津軽マミのオーディションの当日は、朝からとても暑く、クラシック音楽を育んだ土地には似つかわしくないような日だった。太陽が容赦なく照りつける、地球温暖化の兆候とも言うべき陽気だった。イサムは午前中休みを取り、ミュージック・ショップ「ドブリンガー」に近い、ペーターズ教会の前で彼女と待ち合わせていた。

「やあ、元気？」と彼は、少し遅れてきた彼女に、遠慮がちに声をかける。

「そうね……まあまあ」

彼女は、珍しくグレーのスーツを着ていた。ジャケットに、ひざまでのスカート。長い髪は、ポニーテールに。

そして表情は硬く、ほとんど青ざめている。ヴァイオリンのケースを小脇に抱えながら、体中のテンションを一生懸命抑えている風情だった。

「どう？ 眠れた？」

「それなりにね……」と、彼女が気のなさそうに答える。

「今、緊張するのは分かるけれど、本番ではリラックスした方が良いよ」

タクシーの中でも、彼女は静かだった。

「実は私、変な事件に巻き込まれるような気がするの」と、突然彼女がつぶやいた。

「何故？」

「第6感で」

「そんなこと、ないだろうが」

目的地を見つけたのだろうか。タクシーが間もなくスピードを落としはじめた。

アウガルテン宮殿の黄色く、背の低い建物が見えてくる。いわゆる

るマリア・テレジア・イエローで、屋根が茶色っぽい。

二人は白く大きな門の前で、車から降りた。

「それじゃあ、この辺で待つから、グッドラック！」と、イサムが大声で彼女を激励した。

「うん」

彼女は、ヴァイオリンのケースを肩にかけ、楽譜の入ったかばんを手にとって、足早に宮殿の入り口に向かって行った。そして、黄色い建物の中へ。

イサムは背の高い、格子のフェンスの外に留まった。マミは、試験の順番が4番目と、早いのだ。

彼がまわりを見渡すと、同じオーディションに向かう若い学生風の人たちが、次々と到着し、建物に入っていく。

女性もいれば、男性もいる。みな、ヴァイオリンを携えている。

その表情は、総じて硬い。

そして彼は、次第々々に、病院で子供の誕生を待つ父親のような心境になっていった。

「仮にうまく行かなかったら、マミは、日本に帰るのだろうか？
その際は、引き止めるべきだろうか？　もう少しここに留まって頑張れ、別のオーケストラを狙えとか言って？　大体、彼女が失敗したら、俺も責任を感じるかも知れない、勉強の妨げだったかも知れないし……でも、シューベルトの楽譜を買ってあげたのは、俺だよな……」

周りにも同じように、オーディションを受けている息子や娘、兄弟や姉妹、あるいは恋人を待っている人達がいて、なすすべもなく、みな路上で行儀悪くタバコをすったりして気を紛らせていた。

それぞれに、疑心暗鬼に違いない。

それから30分も経っただろうか。

すぐそばで、南アジア系と見られる黒髪の中年男性が、恐らくはお嬢さんの出てくるのを待ちわびていた。

そこでついに、イサムから声をかけてしまった。

「暑いですね、今日は」

「そう、そう。でも、私の故郷は、南インドだからね」

「なるほど。気候風土が違う……ヨガって、インドですよね?」と、イサムが、やぶから棒に尋ねる。

「呼吸法とか、ある奴だろう?」

「そう……」

「あれはもともと、ウパニシャッド哲学で」と、インド人が答える。
「精神統一を、目指すんでしたっけ?」

「自分の意思能力では本来、コントロールしにくい体の機能まで支配し、精神も肉体も、全て支配するのよ」

「すごいですね」と、イサムが合いの手を入れる。

「そうなんだ。心拍数とかリビドーとか、自律神経系の機能まで管理しようとする、一種の覇権主義……」と、インド人が解説する。

「へえ……ひょっとして、お医者さんですか?」と、イサムが尋ねる。

「そう。自律神経系は、交感神経系と副交感神経系に分かれ、身体を制御する」

「複雑ですね」

「そうだね。言ってみれば、超絶的に発達したコンピュータ・システムでさ」

「へえ」

「上手く機能する時は素晴らしいが、不機嫌になると、もう大変。自律神経失調症になるんだよ。不整脈とか……原因は、潜在意識のいたずらで、本来の意識に対する嫌がらせ……映画『2001年宇宙の旅』に出てくる、大型電算機ハル号の反乱に、よく似ているんだ」とインド人が、熱心に語る。

「へえ……その時は、どうすれば良いんですか?」

「良く分からないが、俺の知り合いで、変わった奴がいて……そいつは、自分の潜在意識にペットのような名前をつけて、何回も呼び

つけては、牽制するんだ」

「へえ……面白いですね」

「血圧が上がり、テンションが上がって、シャキッとするんだとき……」

「血圧が、高い時は？」と、イサムが問うてみる。

「Never more、と唱えるんだ」

「ネヴァモア、ですか？」

「エドガー・アラン・ポーの『カラス』に秘められた、メッセージで」と、インド人が言いかけた途端、誰かが声をあげたので宮殿の方を振り返ると、南アジア風の黒髪の女性が、ヴァイオリンを抱えて玄關から出てきた。

インド人の医者が、ほっとした表情で、

「Never mind!」と言いながら、彼女に向かって、

「シリン!」と、叫んだ。

「なるほど、彼のお嬢さんか」と思いながら、イサムも彼女に注目する。

シリンと呼ばれた女性が、鉄格子のフェンスの所まで来ると、インド人が駆け寄って彼女の肩を抱いた。

「どうだった？」と、彼女を慰労する声が聞こえてくる。

やれやれ、ようやく……。

5月雨式に、3、4人のヴァイオリニストが出て来た後、マミが試験会場の建物から現れた。

「やっと!」

彼女は少し、うなだれているのだろうか。

イサムは鉄格子のフェンスにもたれたまま待つが、彼女が近づくにつれ、彼の心臓が強く打ち始める。

そして彼女が近くまで来ると、「マミ!」と、声をかけた。

「うん……」とつぶやきながら、マミが顔をあげる。

「お疲れ様。どうだった?」

「……分からないけど、多分、大きなミスはなかったわ」と彼女が

少し、力の抜けたような声で答える。

「なら、良かったじゃない！」と言って、イサムは、ほっと胸をなでおろす。

取り敢えずは、セーフだろうか……。

帰りのタクシーの中で彼女は少しずつ、試験の様子をイサムに語ってくれた。

「最初に受験者への説明があったけど、それがやたらに長くて、とても暑かった！ 当然のことながら、冷房がなくて……そうこうするうちに、遅刻したアメリカ人の審査員が、顔面蒼白で入ってきたの……9月11日が危ない……インデペンデンス・デイになる、とかつぶやきながら、最後に、ニューヨークのツインタワーでって、叫んだの！ もう、ほとんど変だった」

「へえ……アメリカの独立記念日って確か、7月4日だけだね……それで？」

「それから、番狂わせがあったの。飛び入りの女性がどういう訳か、割りこんできて……」

「そうかあ！ そうゆうのって、頭に来るよなあ」

「そんなこともあり、コチコチ。暑いのに、弓を握る手が、カジカミ・アワー……」

「他の連中も、条件は同じだよ……」と言いながらイサムは、窓の外を眺め、再び口を開いた。

「9月11日と言うと、オーストリアの戦勝記念日だね。1683年、ウィーンはトルコ軍に2ヶ月包囲されて、ようやくこの日、援軍が来るんだ。その翌日、カーレンベルグの丘から突撃したら、トルコ軍は逃げてしまい、残したコーヒーが流行って、カフェが誕生したらしい」

「それは、聞いたことあるかも……」

「ところが1697年の同じ日、オーストリアがトルコに、また勝ったんだよ！ 今度は、オイゲン公の采配で……」

「へえ、因縁深いんだ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2388t/>

7. オーディション

2011年9月1日03時33分発行